

# スマートシティには 文明的視点のヴィジョンが必要

在仏コラムニスト 安部 雅延



## 未来都市が見えてきた？

昨年の9月と12月、静岡県裾野市にあるトヨタ自動車が生産する実証都市のスマートシティ建設予定地の周辺住民は、2022年7月を目標とする具体的な建設計画のお知らせを受け取ったという。

文書には、最初に建設に入るのは（敷地南端にある三角形の土地（約3.5ヘクタール）で、トヨタ輸送の施設があった場所だ。今年3月から造成・建築工事に入った。

トヨタ自動車は今年2月23日、現地で自動運転や人工知能の実証都市「ウーブン・シティ」の「くわ入れ式」を行い、具体的着工に入ったと報じられた。一方、裾野市はトヨタのプロジェクトに合わせ、同市が2020年3月に発表した次世代型近未来都市構想、スソノ・デジタル・クリエイティブ・シティ構想の具体化に踏み出した。

官民一体のスマートシティの実証都市建設は、世界の最先端を行くプロジェクトで注目度も高い。100年に1度といわれる第3次産業革命に直面する産業界は、異業種がコラ

ボすることで、新たなビジネスチャンスが生み出されることへの期待度は高い。

新しいテクノロジーを駆使したスマートシティは遠い未来ではなくなっている。半世紀前、未来都市は超高層ビルの間を高速道路が縫うようにして走り、空を飛ぶ移動手段も発達するようになる一方、コンクリートと金属の無機質なイメージだったが、今では環境に配慮した緑に覆われた低層建築群の構想も生まれている。

当然、スマートシティ建設及び保全には、世界中のあらゆる最先端のテクノロジーが導入される可能性が高く、自動車業界だけでなく、道路や上下水道、ITインフラ、オフィスビルから住宅の居住空間に至るまで、ありとあらゆる建設と運営に関わるテクノロジーにAIを駆使し、そのテクノロジーを世界中から探す必要も高まっている。

そのワクワク感は高く、道路が自動運転と通信技術で運営されれば、無事故の時代を迎えられる可能性も高まっている。無論、今のインフラをスマートシティに移行するには課

題も多く、だからこそその実証にトヨタも乗り出している。

特にスマートシティの安全性向上には、自動車産業とIT企業のコラボから自動運転だけでなく、道路インフラにIT技術が組み込まれ、歩行者など走行の危険検知は実用段階に入りつつある。

たとえば、信号と自動運転が連動し、赤信号では強制停止するシステムの導入も考えられ、同時に完全なEV化で蓄電技術が災害時の電気供給に役立つなど、すでに実用化に向けた取り組みも始まっている。

必要なテクノロジーは公的機関を含め、世界で収集されているデータベースを活用し、実績も踏まえ、迅速に適切なテクノロジーを探し出し、マッチングして導入する流れもできようとしている。

スマートシティへの移行は新しい産業を産み、テクノロジーからサービスマまでイノベーションが繰り返され、経済の活性化にも繋がること が確実視されている。

この方向性は希望だが、果たしてスマートシティ構想はテクノロジーだけけん引しているのか、それと

も人間の生活を便利で安全で豊かにするためにじっくり練られたヴィジョンがけん引しているのか、という視点は重要と思われる。

## 都市は文明度を表現する

近代建築が流行った1970年代、奇抜なデザインだが、居心地が悪く冷暖房も不可能な建物が多く建てられた。その一方で未だに南フランスの100年以上前の石造りの建物や曲がりくねった小道が多い小さな村に住みたいという願望は今でも消えていない。

私が近くに住んでいたパリ左岸15区のボーグルネル地区に、1970年代に出現した旧ホテルニッコーの

近代高層建築もある小さな未来都市があった。その寿命は40年で色あせてしまい、再開発で新たな街ができていた。

西洋には文明という考え方があり、その文明を凝縮したのが都市だ。それは統治機構、権力の誇示、土木インフラ技術、宗教、美観を含む芸術など、ありとあらゆるものが凝縮され、都市は文明の高さを示す最も分かりやすい存在とされている。

そのため、第二次世界大戦で破壊されたヨーロッパ中の町の再建で破壊された石を集め、同じ町を再現したのも、完成度の高い文明を復活させるためだった。日本なら神戸や東日本大震災で破壊された都市を同じ街並みに戻すなど、誰も考えない。



たとえば、中国・深センは高層ビルの立つ未来都市に見えるが、下水インフラは整っておらず、トイレレットペーパーが流せなかったりする。韓国ソウルには下水に問題のある高層ビルが少なくない。目に見える部分を優先させるのは「上げ

底文明」で、ローマ帝国の土木技術にも劣るものだ。

私はスマートシティがそうならないように願う1人だ。私の人生の中で実際何度か大きなプロジェクトに直接関与した経験や得た知見からすると、関わる人間に理系人間が多く、歴史や哲学に無知で重要な構想を練る段階での思慮に欠ける例が少なくなかった。

それと人間と自然の関わり方は、東洋と西洋では根本的に違う。自然崇拜の東洋では自然と人間は横並びで共存は重要なテーマだが、欧米には「神が全ての被造物を人間のために作った」とあるので人間は自然をどう変更しようと勝手だという考えがあり、巨大リゾート開発で自然を破壊している。

スマートシティでは、それはどうなのだろうか。日本も戦後、欧米的考えが一拳に流入し、日本橋という日本の起点になる歴史的な橋の上に高速道路を建設する暴挙に出た。今では美観を損ねたこともあり、後悔もあるようだが、スマートシティは、いずれ孤立した場所での実証実験を終えれば、今ある都市の大改造が始

まるはずだ。

個人的には、全てのテクノロジーは「自然と人体」とは無縁ではないと私は考えており、スマートシティも人間の人体を研究すれば、何が必要なのか答は出てくるはずだ。近代都市の寿命が半世紀持たなかったのは、人体や自然からかけ離れたものだったからだ。私は考えている。

いずれにせよ、非常に複雑で精密に作られた人間に満足感を与えるスマートシティを作るには、テクノロジー以前に哲学や思想、医学の知識も必要だ。環境に配慮し持続可能な発展を可能にする生きた都市にする必要もある。強者だけでなく、弱者にも住みよい環境を提供するのも重要な視点だ。

それに世界中から優れたテクノロジーを見つけて出す過程で、利己的な利益優先の金目当てのビジネスが入り込んできたら、スマートシティ構想は台無しになる。

だから、公益性を最大限重視すべきだろう。それにしても、スマートシティは砂漠に都市を実現させるようなワクワク感のある話であることは確かと言える。